

# 地方に残る庭園文化 - 「出雲(出雲流)」と「津軽(武学流)」 -

木佐幸佳

## 1. はじめに

以前に出雲地方と同様に、独特な庭園づくりが津軽地方に残っていることを報告した。昨年、青森県を訪れて現地のこれらの庭を見るとともに、地元の人から庭にまつわるいろいろな話を聞いた。また、庭に関する資料を地元の図書館で入手したので、津軽地方の庭園づくりを報告するとともに出雲地方との比較を試みた。

## 2. 武学流庭園とは

津軽地方では独特の庭園づくりを「大石武学流」あるいは「武学流」と呼ぶ。その名前の由来は分からないという。その庭園づくりの特徴をいくつか挙げてみる。

### 1) 池泉式庭園が多い

今回見たほとんどの庭には真ん中に大きな池があり、規模が大きな庭は回遊式だが、小さな庭は座敷から眺めて鑑賞する(座鑑式)。この池と使われている自然石が、最初に見た時に強い印象を与える。築山はあまり大きくなく、隣地境の大木の根元に低木があるため、平地が広く開放感がある。

### 2) 礼拝石がある

座敷から見えるように庭の中央に大きな礼拝石を置く。池がある場合はそのほり



写真-1 代表的な武学流庭園(盛美園)

に置く。その石の上に供え物を置いて、「神仏」や「菩薩」に礼拝するため、人はその石に乗ってはいけないと子供の時から言い聞かされているという。自然崇拝や宗教的要素が感じられる。

### 3) 大ぶりの自然石を使う

礼拝石を始め、飛石、手洗い石（蹲踞）、灯籠などに大ぶりの自然石を使うため、野趣豊かな印象を受ける。

飛石は、沓脱石から礼拝石、手洗い石（蹲踞）、二神石への2方向あるいは3方向に置かれている。歩きやすさはあまり考えずに置かれており、礼拝石までは奇数個にするという。また、手洗い石への飛石の近くに丸い石（臼石を逆さにしたもの）があり、人待石と呼ぶ。

灯籠はどれも同じ形をしており、火袋部分だけは丸く加工した石を使い三日月形の穴が開いており、野夜燈（やどう）と呼ばれている。

滝石組は庭の奥に配置し、遠山石という三角形型の石を庭の一番奥に置く。



写真-2 礼拝石(真ん中の大きな石)



写真-3 飛石



写真-4 手洗い石(蹲踞)



写真-5 灯籠



写真-6 遠山石



写真-7 二神石



写真-8 滝石組



図-1 武学流庭園の築庭技法

#### 4) 樹木が大きい

隣地との境には大きな木を植えて、借景をしないのが一般的。庭の主木はクロマツで、出雲地方とは違ってあまり手入れをせず大きい。樹木の知識が乏しいため詳しくは分からないが、ツツジ類は少なく花物も少ないようだ。総じて木や石が大きいいため、庭自体に立体感がある。



写真-9 主木のクロマツ



写真-10 隣地境の大木

### 5) 方位との関係性はない

座敷から見る庭は東向き、北向き、南向きなど様々であり、方位はあまり意識されていないようだ。しかし、座敷から見える庭の中心部に礼拝石を置いたり、座敷周りに平地を広くとるなどの特徴が見られる。

## 3. 具体的な庭園

### 1) 盛美園（せいびえん）【平川市】

明治 35 年から 9 か年を掛けて作られ、武学流庭園の最高傑作といわれる。昭和 28 年に国の名勝指定。地元の大庄屋清藤盛美（もりよし）が作ったもので、築山や池をめぐる回遊式と屋敷から眺める座鑑式となっている。平地部分が広くとってある。屋敷は 1 階が和風、2 階が洋風づくりの和洋折衷の珍しい様式で「盛美館」と呼ぶ。この館はスタジオジブリのアニメ映画「借りぐらしのアリエッティ」のモデルになっており、多くの観光客が訪れるという。池の向こう側から見下ろすと、庭と屋敷がよくマッチしており、異空間を見ている思いがした。

盛美の曾孫に当たる方の話によると、「盛美園の整備には当時この地域が凶作だったため、多くの地元民を雇用した。その人たちが造園技術を覚え、のちにこの地域では造園業が盛んになり、今では金沢の兼六園まで出かけている」とのことだった。



写真-11 盛美園



写真-12 盛美館(園内)

### 2) 金平成園（かねひらなりえん）【黒石市】

黒石市内には大小の武学流庭園があり、町歩きガイドの方の案内で見て回った。その 1 つが金平成園。県内屈指の庭園で平成 18 年に国の名勝に指定されている。地元の政治家加藤宇兵衛が明治 35 年に作ったもの。広い池がある回遊式と座鑑式で、元はもっと広がったという。この庭の整備は、加藤が地元の失業対策事業の一環として行った。庭の名前は「万民に金が行き渡り、平和な世の中になるように」という願いから「金平成園」と名付けられた。

この庭は平成に入ってから 10 年ほど掛けて修復事業が行われ、4 年前に完了し今は期間限定で公開されている。屋敷側から眺めると剛健さが感じられて、ゆったりと

した時間の流れに浸ることができる。



写真-13 金平成園



写真-14 // (屋敷側から見る)

### 3) 清藤氏書院庭園 (せいとうししよいんていえん) 【平川市】

盛美園の隣にあり、平庭枯山水の座鑑式。武学流庭園の源流ではないかと言われている。元はもっと広い庭であったが、明治時代の道路拡張で土地を出したため、今の形になったとのこと。この庭も昭和54年、屋敷（明治初期の建築でかやぶき屋根）とともに国の名勝指定になっている。江戸時代末期にはすでに庭はあったが、いつ誰が武学流に作ったかはわからないとのことだった。当主からは清藤家の由来や津軽藩発祥の話、リンゴの話など面白い話をいろいろ聞くことができた。



写真-15 清藤氏書院庭園



写真-16 清藤邸

### 4) 鳴海氏庭園 (なるみしていえん) 【黒石市】

黒石市街地の古い造り酒屋の中庭にある代表的な庭園。三代目当主の鳴海文四郎が明治20年ごろに作ったと言われ、南北に長い石組の池を中心にして、礼拝石・飛石・蹲踞・遠山石など武学流庭園の様式が整っている。ここは座鑑式で隣家とは大木で仕切られている。どのようにして数多くの大きな石が、この中庭に運び入れられたのか大変興味深いところである。



写真-17 鳴海氏庭園



写真-18 // (池の向こうの遠山石)

#### 5) 揚亀園 (ようきえん) 【弘前市】

弘前市街地の観光施設「津軽藩ねぷた村」の中にある。明治時代の実業家中村三次郎が作った庭園で、回遊式および座鑑式である。園内の茶室「揚亀庵」からは岩木山が望めるという。池や礼拝石、主木のクロマツなどの樹木がとにかく大きい。



写真-19 揚亀園(1)



写真-20 // (2)

#### 4. 出雲と津軽の違い

出雲と津軽の庭園づくりの比較を、表-1のようにまとめてみた。その中で津軽にあって出雲にない3つの大きな点がある。

##### 1) 宗家制度

武学流庭園では宗家制度があり、現在の宗家が次の宗家を指名して作庭技術の伝承が行われている。血縁関係による相伝ではないとのことであり、現在は8代目の木村亭星氏である。宗家には代々庭園づくりの「極意伝書」が受け継がれていたが、途中で焼失したため再度作られている。そのため、発祥の起源や初期宗家のことなど不明な点が多いとのこと。

	出雲流庭園	武学流庭園
庭園の形	枯山水式が多い	池泉式が多い
大きさ	中小規模？	大小様々
方位との関係	あり	なし
屋敷との関係	あり	あり
樹木の特徴	あり	あり
借景	ありかも	なし
飛石の特徴	機能性重視	象徴性重視
宗教的要素	なし	あり（礼拝石）
立石の特徴	なし	あり（遠山石など）
作庭の伝承	不明	宗家制度
所有者の地域貢献	不明	あり
語り部	いない	いる
地元での認知度	なし	あり（タクシー運転手等）
観光客へのPR	なし	あり（町歩きガイド等）

表－1 出雲流庭園と武学流庭園の比較

そして、宗家が手掛けた庭だけを武学流庭園と呼ぶという。庭には大きな池がある屋敷庭園から商家の中庭や小さな庭まで、大きささまざまな形がある。

## 2) 所有者の地域貢献

庭を作った所有者はいずれも地元の資産家であるが、単に個人的な趣味だけで庭を作ったのではなく、巨石の運搬などに地元民を雇用して壮大な社会救済事業を行って、困窮した地域に貢献したという話を聞いた。

武学流庭園の特徴は「多くの人の幸福を祝い、それを支えてくれる神仏への感謝の念が基盤にある」ともいわれ、庭を作った所有者の思いと相通じるものがあるのを感じた。

## 3) 語り部や地元情報誌によるPR

津軽地方では、この庭園づくりの語り部がいるため、シンポジウムやサミットなどが行われている。また、地元情報誌で「庭園」の特集が組まれて発刊されており、住民の中にもこの庭園づくりのことを知っている人が多いようだ。残念ながら出雲地方では、独特な庭園づくりを語れる人も情報誌による紹介もない状況である。

## 5. 出雲と津軽の共通性

津軽地方を訪れた時期は7月末～8月初めで、ちょうど「ねぶた祭り」が始まる時期であった。青森市の「ねぶた祭り」を見ながら思ったことは、この地域にある「ねぶた祭り」、「棟方志功の板画」、「津軽三味線」などから感じる独特の風土と「武学流



写真-21 青森市の「ねぶた祭」



写真-22 庭園特集の地元情報誌

庭園」はつながっているように思われた。(ちなみに津軽・下北の各地に「ねぶた」があり、その数は30をこえる。弘前などでは「ねぶた」という)

一方、出雲地方では「定型の屋敷」、「築地松」、「茶文化」などがあり、「出雲流庭園」との関係が濃密である。

両方に共通するのは、豊かな地方文化と庭園づくりが結びついているということである。そして、多くの民家にまで同じ様式で庭が広まっている。

## 6. おわりに

昨年、庭園文化研究分科会では出雲文化伝承館と協力して、地元住民を対象とした「出雲流庭園」の文化講座を2回行った。参加者は出雲流庭園について初めて聞く人が多く、館内の庭を説明して回るガイドランスでは活発な意見が出て、予定時間をオーバーするくらいであった。また、ちょうど同じ時期に、「なぜ出雲には隠れた名園が多いのか」をテーマにしたニュースがNHKから全国放送された。

出雲地方に残る独特な庭園づくりは、全国に誇れる貴重な文化だと思う。そのため、このことを地域の人たちに広めていくことが、まず必要ではないかと考えている。今後も津軽など他地方を参考にして、出雲流庭園のPRに取り組んでいきたい。

### ○参考文献

- 1) 「特徴ある地方庭園文化 “出雲と津軽”」 木佐幸佳  
H22年度研究報告 島根県技術士会
- 2) 隔月刊あおもり草子「特集 津軽の庭園 大石武学流」239号
- 3) 「武学流庭園について」 小口基実、戸田芳樹
- 4) 観光資源調査報告 VOL.6 「津軽の庭 武学流庭園を中心として」  
(財)観光保護資源財団
- 5) 「大石武学流庭園シンポジウム ～津軽の庭の価値と継承～」記録集  
青森県弘前市教育委員会